

IV. 平成 27 年度事業に対する自己評価

1. 平成27年度大学教育再生加速プログラム外部評価の結果と今後の取組

1	SIH道場の実施と改善	AP事業 自己評価	外部評価委 員会の評価	H28年度 目標 ポイント	必要な対応
1-1	各教育プログラムは適切に設計・運営・実施されたか	3	3		FD・説明会への参加率の向上を図ると共に、前年度のプログラム設計評価シートに基づいた改善を行う。
1-2	学生はSIH道場の目標に到達したか	4	3	4	自己評価と外部評価に差。報告書P.171記載のように、「振り返りの時間を十分に設けていないプログラムや学生が行った振り返りに対して、十分なフィードバックを行っていないプログラム」への対応はもろろんであるが、それだけでなく、担当教員が実感している学生の成長を、外部にもわかりやすい形で提示することが必要である。SIH道場の目標に鑑みた学生の学修成果を、学生アンケートに限らない、担当教員以外の視点からも納得できる形で可視化することが求められる。
1-3	教員はSIH道場の目標に到達したか	2	2	3	
1-4	次年度のプログラム改善に向けた検証が実施されたか	3	3		プログラム設計評価シートの「次年度に向けた対応」欄への記述について、次年度の改善につながるような具体的な記述をコーディネーターに促す。
1-5	実施のための支援（教育改革推進部門、ICT活用教育部門、SIH道場コンテンツ作成WG等）は適切に行われたか	4	3	4	自己評価と外部評価に差。実施支援についても成果を可視化する工夫をし、実施支援の取組についても総合教育センター各部門が振り返りと改善を行うことが可能である。
2	アクティブ・ラーニングの普及				
2-1	アクティブ・ラーニングを学士課程全体に波及させるための環境整備が適切に行われたか	4	4		関連図書をさらに充実させると共に、eポートフォリオシステム利用のための支援を継続する。
2-2	アクティブ・ラーニングを学士課程全体に波及させるための取組が効果的に実施されたか	2	2	3	自己評価（報告書P.176-177）では、アクティブ・ラーニング普及のための主な取り組みとして事例カード及びAPシンポジウムの2つを挙げている。事例カードについては、引き続き事例の蓄積を進めると共に、全学的な提供を目指した公開方法について検討する。またAPシンポジウムについては出席者が全教員が1割程度に限定されていたことから、より多くの教員が参加の必要性を感じられるような工夫が肝要である。
3	事業運営の体制				
3-1	AP実施専門委員会の組織構成は、事業目的に照らして、適正なものであったか	4	4		今後も現在の組織構成を維持し、事業を企画・運営していく。
3-2	AP実施専門委員会の運営は、事業目的に照らして、適正なものであったか	3	3		AP実施専門委員会からコーディネーターへの情報伝達の方法について、工夫・改善策を検討する。
3-3	事業の効果検証に基づき、改善に繋げるためのPDCAサイクルが整備されていたか	3	3		AP事業全体を通してPDCAサイクルを継続する。
4	情報公開				
4-1	AP事業の取組を学内へ適切に広報し共有していたか	3	3		大学ウェブページでの情報提供を充実させると共に、「SIH道場振り返りシンポジウム」への参加者数を向上させる。
4-2	AP事業の取組を学外へ適切に広報し情報提供していたか	4	4		引き続き、学外の大学関係者が多数集まる場において、SIH道場の取組についての発表を行う。

4：十分に達成できた 3：おおむね達成できた 2：達成が必ずしも十分ではない 1：達成できなかった

今後必要と考えられる取組

- ・SIH道場の学修成果の可視化と共有
- ・プログラム実施支援の取組の振り返りと改善の仕組みの検討
- ・教員にとつてのSIH道場の意義の明確化と共有
- ・全学へのアクティブ・ラーニングの普及

平成 27 年度大学教育再生加速プログラム外部評価を受けての 対応及び改善について

大学教育再生加速プログラム実施専門委員会

1-2 学生は SIH 道場の目標に到達したか		AP 事業 自己評価	外部評価 委員会の評価	平成 28 年度 目標ポイント
		4	3	4
		平成 28 年度対応可能なもの		継続的検討を要するもの
委員会の取組	AP 実施専門	(1) 全学の 1 年次・2 年次の学生を対象とした、SIH 道場の学修経験についての調査		
	各プログラムの取組	(2) 【総合科学部】学生アンケート回収率向上に向けた取組		
		(1) 「ラーニング・ライフ」調査結果を用いた SIH 道場の効果検証 (1) 全学の学生を対象とした、SIH 道場の学修経験についての調査(平成 30 年度実施)		

☆ 関連する各委員からのコメント

- 総合科学部の学生のアンケートでは、約半数が積極的に取り組んでいないと回答している。医・歯・薬学部とは異なり「専門領域早期体験による学習の動機づけ」の効果が見られない。この学部のアンケート回収率が極めて低いことと併せ、原因を調査し改善すべきである。(青野透委員長総評)
- 学生の目標達成について、プログラム内容に対する理解や満足感以外に、本プログラムによって学生のラーニングスキルがいかに身に付いたかの観点で達成度を測ることが重要との指摘が委員からなされており、改善に生かすよう検討されたい。(青野透委員長総評)
- 学生の目標達成については、プログラム内容に対する理解や満足感以外に、本プログラムによって学生のラーニングスキルがいかに身に付いたかの観点で満足度を測ることが重要である。(福富純一郎委員)
- このプログラムの本来の目標である学生の勉学意識、内容理解、改善手段等の向上に、より重点をおくことが期待される。(桑折範彦委員)

- 総合科学部の学生アンケート回収率が極めて低い。原因を調査し次年度は改善すべきである。(西野瑞穂委員)

☆ 求められる取組

- (1) SIH 道場受講生を対象とした調査によって、SIH 道場での学修経験がその後の大学における学修活動においてどのような意味をもつのかを検討し、外部にもわかりやすい形で可視化する。(AP 実施専門委員会の取組)
- (2) 総合科学部のアンケート回収率の向上に努める。(各プログラムの取組)

☆ 求められる取組への対応・改善

- (1) 平成 28 年度は SIH 道場実施 2 年目にあたり、全学の 1 年次・2 年次の学生すべてが SIH 道場受講経験者となる。これを活かし、平成 28 年度に全学の 1 年次・2 年次の学生を対象とした調査を行う予定となっていたため、これによって対応可能である。また平成 30 年度には、全学の 1 年次から 4 年次の学生すべてが SIH 道場受講経験者となることを受け、全学の学生を対象とした調査を行う予定である。こうした調査の結果から、SIH 道場における学修経験がその後の学生生活でいかに意味づけられ、4 年間の学修活動においてどのような影響を与えるのかを明らかにすることとしており、この取り組みによっても対応が可能である。

さらに、本学では学生の学修活動についての現状把握と改善のため、「ラーニング・ライフ」の調査を継続的に行っている。この結果を、SIH 道場実施前の学生と、SIH 道場受講経験者とで比較・検討することで、SIH 道場実施による効果についての検証が可能である。

- (2) 総合科学部のアンケートについて、コーディネーターと協議し、回収率向上に向けての取組について確認する。

1-3 教員は SIH 道場の目標に到達したか		AP 事業 自己評価	外部評価 委員会の評価	平成 28 年度 目標ポイント
		2	2	3
		平成 28 年度対応可能なもの		継続的検討を要するもの
委員会の取組	AP 実施専門	(1)コーディネーターに対する、「SIH 道場実施支援の取組に対する要望について」の配布による、要望の聞き取り(準備中)		(2)教員アンケートにおける、実施支援の取組に対する満足度についての項目の追加、及びコーディネーター・総合教育センター・AP 実施委員会への要望についての記入欄の設定

☆ 関連する各委員からのコメント

- プログラムの要素 (e コンテンツ, Moodle, Mahara, 授業方法等) はかなり整備されたが、利用の度合いはまだ十分ではない。(桑折範彦委員)
- 支援部はプログラム設計者の支援だけではなく、担当教員全員に対し支援することが望まれる。(西野瑞穂委員)

☆ 求められる取組

- (1) 実施支援の取組の振り返りと改善を行うための仕組みを整備する。(AP 実施専門委員会の取組)
- (2) 各プログラム担当者からの要望を調査し、各コーディネーターと連携して可能な対応について検討する。(AP 実施専門委員会の取組)

☆ 求められる取組への対応・改善

- (1) コーディネーターに対してプログラム設計評価シートを送付する際、総合教育センター及び AP 実施専門委員会に対する要望についての聞き取りを行う「平成 28 年度『SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～』実施支援の取組に対する要望について」を併せて送付する。
- (2) 教員アンケートに、実施支援の取組に対する満足度についての項目を追加し、実施支援の取組の改善のためのリソースとする。さらに、コーディネーター、総合教育センター及び AP 実施専門委員会に対する要望についての自由記述欄を設け、その内容に対する可能な取り組みについて各コーディネーターと協議する。

1-5 実施のための支援(教育改革推進部門、ICT活用教育部門、SIH道場コンテンツ作成WG等)は適切に行われたか		AP事業 自己評価	外部評価 委員会の評価	平成28年度 目標ポイント
		2	2	3
平成28年度対応可能なもの		継続的検討を要するもの		
委員会の取組	(1)SIH道場の意義についての簡略なりーフレットの作成と頒布(実施中) (2)各学部FDの現状把握(実施中)	(3)APシンポジウムにおける、SIH道場の意義・改善策についての、教員との協議		
各プログラムの取組		(4)【全プログラム】APシンポジウムへの積極的な参加の要請		

◇ 関連する各委員からのコメント

- 評価委員会が「2：達成が必ずしも十分ではない」とした項目の一つは、「教員は道場の目標に到達したか」である。道場は「学生と教員が共に学び合い成長する科目」として導入された、本事業の要である。学生の満足度はアンケート結果でも約80%と高い。一方、教員の約半分は満足していないと回答している(回答率も約3割)。さらにアンケートでは教員が講義の振り返りをあまりしていない実態が明らかになっている。教員がより積極的に本事業に参加するための動機付けの工夫を含め、教員について「現場実践型職能開発によりティーチングスキルを向上させる」とする目標達成に向け早急な改善が必要である。(青野透委員長総評)
- 教員の負担が大きすぎるように思います。教員の方々が研究されている事柄がそのまま活用できるプログラムであれば教員の方々の負担も減り良いのではないかと思います。(…中略…)教員の方々には、それぞれの考え方があり、どの考え方をプログラムに反映させるかを決めるのは難しいと思いますが、教員の方々の考え方の方向性のある程度そろえ、プログラムを構築する必要があると思います。(林正委員)
- 教員の満足度が低く、さらには回答率が3割程度とかなり低い。満足度が低いということは、本プログラムに対して何らかの意見をお持ちの場合と、やらされている感じがある場合とが考えられる。まず、ご意見をお持ちの場合が多いと考えられるため、その意見を伺いに足を運ぶなどしたいところだ。(横井秀郎委員)
- SIH道場の満足度は、学生の満足度が約80%と高く、実施教員は50%であり、大

きな開きがある。教員に対して SIH 道場の主旨について更に理解を深めるよう支援する必要がある。(桑折範彦委員)

- 学生も教員も、学生が「授業の振り返り」をすることの意義は大きいと回答しているが、教員が自身の講義の振り返りをしたいとの回答は極めて低かった。それは、振り返りの手順が煩雑と感じているためと考えられる。(西野瑞穂委員)
- プログラム実施後の教員アンケート集計数やその結果等から、本プログラムの意義やビジョンが授業担当教員まで十分に共有されていない面がみられる。本プログラムに対する授業担当教員の満足度が低い理由を明らかにし、それを改善に組み込んでいくことを期待する。(福富純一郎委員)

◇ 求められる取組

- (1) プログラムの意義について簡略にまとめた資料を作成・頒布する。(AP 実施専門委員会の取組)
- (2) 各学部における FD の現状の把握に努めると共に、SIH 道場に対する要望について各学部からの意見を求める。(AP 実施専門委員会の取組)
- (3) SIH 道場担当教員と、AP 実施専門委員の双方が、SIH 道場の教員にとっての意義やそのための取組について、自由に協議する場を設ける。(AP 実施専門委員会の取組)
- (4) 上記の取組によって設定した協議への積極的な参加を促し、教員それぞれが当事者として事業の意義や今後の在り方について能動的に協議・提案を行う。(各プログラムの取組)

◇ 求められる取組への対応・改善

- (1) AP 実施専門委員会ではすでに、SIH 道場の取組や目的、意義について簡略にまとめたリーフレットを作成し、教員に頒布を行っている。プログラムの意義について簡略にまとめた資料の作成・頒布については、これによって対応できていると考えられる。
- (2) 全学 FD 推進プログラムと連携し、各学部における FD の現状の把握に努めると共に、本事業への理解の促進や要望について意見を求める。実際に、事業の支援を行う総合教育センター教育改革推進部門の教員が学部 FD 委員会に陪席し、学部 FD 委員や授業設計コーディネーターとの意見交換を行うなど、事業に対する相互理解を行うための取組を始めている。
- (3) AP シンポジウムにおけるフロアとのディスカッションを拡大し、教員が SIH 道場の取組について協議と提案を行える場とすることで、教員が FD や SIH 道場の取組について能動的に考え、関わる機会を設ける。
- (4) 上記のような場を AP シンポジウムに設けることを教員に周知し、幅広い参加を呼びかける。

2-2 アクティブ・ラーニングを学士課程全体に波及させるための取組が効果的に実施されたか		AP 事業 自己評価	外部評価 委員会の評価	平成 28 年度 目標ポイント
		2	2	3
平成 28 年度対応可能なもの		継続的検討を要するもの		
委員会の取組	AP 実施専門	(1)ウェブ上における学内への事例カードの公開(準備中)		
		(2)AP シンポジウムにおける, SIH 道場の意義・改善策についての, 教員との協議		
取組	各プログラムの	(3)【全プログラム】AP シンポジウムへの参加と積極的な議論の推奨		

◇ 関連する各委員からのコメント

- 「2」と評価されたもう一つの項目は、「AL を学士課程全体に波及させるための取組が効果的に実施されたか」である。環境整備は完了している。学年進行に伴い、AL の実質化を学士課程全般に浸透させていくことが事業目標となっており、28 年度以降、全学的な取組を強化することが必要である。(青野透委員長総評)
- 教員の先生もプログラムの対象とするのではなしに、共にプログラムを作る一因としてのかかわりが必要であるだろう。(横井秀郎委員)
- 教員の効果的な教育方法への意識改革とその実践も目指すところである。(桑折範彦委員)
- 各学科等で、本プログラム実施以前から学士課程 4 年間のカリキュラム検討の中で、初年次教育に向き合い苦労しながら取り組んできている現場の授業担当教員と十分に話し合い、ビジョンを共有しながら全体の意思を決定していくことがプログラム成功のために必要と考える。(福富純一郎委員)

◇ 求められる取組

- (1) 事例カードの全学的な提供を目指した公開方法について検討し、教員の授業設計のための指針としての活用につなげる。(AP 実施専門委員会の取組)
- (2) 教員が FD や SIH 道場の取組について能動的に考え、積極的に意見できる機会を設ける。(AP 実施専門委員会の取組)
- (3) FD や SIH 道場の取組のあり方や今後の改善方法について、全教員が当事者として関わり、考えることを推奨・促進する。(各プログラムの取組)

◇ 求められる取組への対応・改善

- (1) 全教員がウェブ上で事例カードを閲覧できる仕組みについては既に、平成 28 年度内の公表を目指して検討中であるため、これによって対応が可能である。
- (2) AP シンポジウムにおけるフロアとのディスカッションを拡大し、教員が SIH 道場の取組について協議と提案を行える場とすることで、教員が FD や SIH 道場の取組について能動的に考え、関わる機会を設ける。
- (3) AP シンポジウムにおける協議の場へ積極的に参加し、当事者としての視点から FD や SIH 道場の在り方や今後の改善方法について積極的に議論する。

2. 平成28年度徳島大学教育再生加速プログラム事業自己評価結果一覧表

評価基準 (評価指標) 4:十分に達成できた 3:おおむね達成できた 2:達成が必ずしも十分ではない 1:達成できなかった

1. SIH道場の実施と改善

1	SIH道場の実施と改善	平成27年度 自己評価	平成27年度 外部評価	平成28年度 改善目標値	平成28年度 自己評価	改善にあたっての具体的な取り組み
1-1	各教育プログラムは適切に設計・運営・実施されたか	3	3	/	3	/
1-2	学生はSIH道場の目標に到達したか	4	3	4	3	<ul style="list-style-type: none"> 総合科学部における学生アンケート回収率の向上 「ラーニング・ライブ」調査結果を用いたSIH道場の効果検証(現在実施中)
1-3	教員はSIH道場の目標に到達したか	2	2	3	3	<ul style="list-style-type: none"> 教員アンケートの回収率の向上 教員ポータルサイト作成率の向上 教員アンケートにおける、実施支援の取組に対する満足度、及び要望についての自由記述の項目の追加 授業設計コーナーネイターに対する「平成28年度『SIH道場へアクティブ・ラーニング入門～』実施支援の取組に対する要望について」の送付
1-4	次年度のプログラム改善に向けた検証が実施されたか	3	3	/	4	/
1-5	実施のための支援(教育改革推進部門、ICT活用教育部門、SIH道場コンテンツ作成WG等)は適切に行われたか	4	3	4	3	<ul style="list-style-type: none"> SIH道場についてのリーフレットの作成と配布 全学FD推進プログラムとの連携による、各学部におけるFDの現状把握と意見交換 APシンポジウムにおける「自由参加型デジタルイノベーション」の実施

2. アクティブ・ラーニングの普及

2	アクティブ・ラーニングの普及	平成27年度 自己評価	平成27年度 外部評価	平成28年度 改善目標値	平成28年度 自己評価	改善にあたっての具体的な取り組み
2-1	アクティブ・ラーニングを学士課程全体に波及させるための環境整備が適切に行われたか	4	4	/	4	/
2-2	アクティブ・ラーニングを学士課程全体に波及させるための取組が効果的に実施されたか	2	2	3	3	<ul style="list-style-type: none"> アクティブ・ラーニング事例カードのWebでの公開 APシンポジウムにおける「自由参加型デジタルイノベーション」の実施

3. 事業運営の体制

3	事業運営の体制	平成27年度 自己評価	平成27年度 外部評価	平成28年度 改善目標値	平成28年度 自己評価	改善にあたっての具体的な取り組み
3-1	AP実施専門委員会の組織構成は、事業目的に照らして、適正なものであったか	4	4	/	3	/
3-2	AP実施専門委員会の運営は、事業目的に照らして、適正なものであったか	3	3	/	3	/
3-3	事業の効果検証に基づき、改善に繋げるためのPDCAサイクルが整備されていたか	3	3	/	4	/

4. 情報公開

4	情報公開	平成27年度 自己評価	平成27年度 外部評価	平成28年度 改善目標値	平成28年度 自己評価	改善にあたっての具体的な取り組み
4-1	AP事業の取組を学内へ適切に広報し共有していたか	3	3	/	3	/
4-2	AP事業の取組を学外へ適切に広報し情報提供していたか	4	4	/	4	/

◆ 参考

- ・ 自己評価については、事業2年目（SIH道場実施年度）から毎年度行い、事業改善を行う。
- ・ 事業最終年度には総合評価を行い、事業全体の目標に到達できたかどうかを評価する（別途項目を作成）。

◆ 外部評価の流れ

- 1) AP実施専門委員会による自己評価
- 2) 平成28年度事業実施報告書（自己評価報告書）の作成
- 3) 外部評価委員会による外部評価
 - ・ 各委員の外部評価⇒委員会において総評をとりまとめる
 - ・ 委員会による各コメント、評価結果を含め、次年度の報告書に掲載

3. 平成 28 年度大学教育再生加速プログラム事業に対する自己評価

徳島大学大学教育再生加速プログラム事業（以下、「AP 事業」という。）については、毎年度自己評価を行い、外部評価委員会を開催し、事業評価を受けることで次年度の改善につなげることをとしている。

自己評価については、「1. SIH 道場の実施と改善」「2. アクティブ・ラーニングの普及」「3. 事業運営の体制」「4. 情報公開」の 4 つの大項目について、それぞれ小項目を立て、以下の 4 段階で評価を行った。

なお、平成 27 年度の外部評価委員による評価結果を基に、①外部評価の結果が自己評価よりも低い、②外部評価・自己評価共に「2：達成が必ずしも十分ではない」以下である、のいずれかに当てはまる項目については、平成 28 年度の改善目標値を定め、改善に向けた取組を行うこととした。

「4：十分に達成できた」

「3：おおむね達成できた」

「2：達成が必ずしも十分ではない」

「1：達成できなかった」

1	SIH 道場の 実施と改善	平成 27 年度 自己評価	平成 27 年度 外部評価	平成 28 年度 改善目標値	平成 28 年度 自己評価
1-1	各教育プログラムは 適切に設計・運営・ 実施されたか	3	3		3

○自己評価の根拠（評価 3）

平成 28 年度の SIH 道場では、16 プログラムが展開された。各プログラムは概ね昨年度の実施内容を中心として設計されていたが、授業設計に際しては、昨年度の授業設計コーディネーターが作成した「プログラム設計評価シート」を参照することとし、昨年度の授業設計コーディネーターによる振り返りを踏まえた授業設計を求めた。これにより、昨年度の成果を踏まえての授業設計と改善が各プログラムにおいて行われ、より適切な授業設計が行われたといえる。

但し、一部の学部においては平成 28 年度に大幅な改組が行われ、この関係で昨年度 SIH 道場のプログラムに組み込まれていた授業の開講時期が後期へと変更になるなどし、これにより、本来なら 1 年次前期に実施されるべき SIH 道場の一部が後期に持ち越される結果となった。入学直後の時期に受講するという SIH 道場の主旨に鑑みると、こうした場合には前期に導入教育を実施するなど、前期中に学生が SIH 道場必須項目全てに関わる体験ができるよう何らかの対応が必要であったといえる。以上に鑑み、本項目について「3：おおむね達成できた」と評価した。

○今後の改善点

- 平成 29 年度授業設計コーディネーターとの連携を強化し、1 年次前期で SIH 道場の必須項目を網羅できるようプログラム設計の見直しを行う。
- 改組や時間割の変更による SIH 道場のプログラム設計への影響について周知し、1 年次前期で SIH 道場の必須項目を網羅するプログラムになっているかについて、プログラム設計の段階で授業設計コーディネーターが確認するよう注意を促す。

外部評価者メモ部分

1	SIH 道場の 実施と改善	平成 27 年度 自己評価	平成 27 年度 外部評価	平成 28 年度 改善目標値	平成 28 年度 自己評価
1-2	学生は SIH 道場の目 標に到達したか	4	3	4	3

○自己評価の根拠（評価 3）

各プログラムの授業設計コーディネーターが作成することとなっている「プログラム設計評価シート」の記載を見ると、16 プログラム中 12 プログラムの授業設計コーディネーターが、SIH 道場の必須項目となっている早期体験・文章力・プレゼン力・協働力の 4 項目全てについて、学生が達成目標を達成できたとしていた。このことから、授業設計コーディネーターは学生の学習成果を高く評価しており、大部分のプログラムでは学生が一定の成果を修めたと評価できると考えた。

しかし、一部のプログラムでは、コーディネーターが学生の学習成果が十分ではないとする記述が見られた。看護学専攻の「プレゼン力」及び「協働力」では、いずれも授業設計コーディネーターは、学生は到達目標を達成したかという問いに「どちらともいえない」と回答している。この理由として授業設計コーディネーターは、プレゼンについてはプレゼンする学生が限られていたこと、また協働力については学生アンケートを参照し「97%は理解していたものの、役立っていると答えたのは 88%になっており、少し解離がみられる」ことを挙げている。

社会基盤デザインコースの授業設計コーディネーターは、文章力の項目において、学生は到達目標を達成したかという問いに「どちらともいえない」と回答している。また改善したい点については、「ビデオ学習、反転授業を利用したい」と回答している。

電気電子システムコースでは、授業設計コーディネーターは早期体験・文章力・プレゼン力・協働力の全ての項目に関して、学生は到達目標を達成したかという問いに「どちらともいえない」と回答している。またその理由として、早期体験においてはその内容が「SIH との関連が明確ではなく、効果的と断言することはできない」としており、また文章力・プレゼン力・協働力においては「成果が得られたとは思われるが、アンケート調査では、効果的と断言することはできない」としている。

応用理数コースの授業設計コーディネーターは、文章力の項目について、学生は到達目標を達成したかという問いに「いいえ」と回答している。また改善したい点として、「事前学習としてビデオコンテンツを見るように指導したが機器の不調のためにビデオコンテンツを見られない学生が多数いたようである」とことと「レポートが感想文になっており、論理的な構成になっていない」こと、また次年度に向けた対応として「ビデオコンテンツを見られる機器の確認をする」とことと「レポート作成のためのアカデミック・ライティングを意識した指導が必要」であることが挙げられている。以上のような「プログラム設計評価シート」における各授業設計コーディネーターの記述から、全てのコースにおいて十分に目標が達成されたとはいえないが、15 コース中 11 コースでは必須項目すべてに対して十分な学習成果が得られたと評価されており、また 4 コースにおいても、その理由や改善策については十分に提案されていると考えられる。

また、本項目において平成 27 年度、自己評価を「4：十分に達成できた」と判断したのに対し、外部評価委員会による評価は「3：おおむね達成できた」であったことを受け、改善の取組を実施した。まず、総合科学部の学生アンケートの回収率について、平成 27 年度は人間文化学科が 61%、社会創生学科が 67%、総合理数学科が 66%であり、回収率の低さが指摘された。これを受け、総合科学部の学生アンケートの回収率向上の取組を行ったが、平成 28 年度総合科学部の学生アンケート回収率は 3 コース合同で 64.4%となり、回収率向上は達成できなかった。

また、SIH 道場の学修成果の評価方法について、プログラム内容に対する理解や満足感以外に、本プログラムによって学生のラーニングスキルがいかに身に付いたかの観点で達成度を測ることが重要との指摘が外部評価委員から為された。これを受け、SIH 道場受講生を対象とした調査によって、SIH 道場での学修経験がその後の大学における学修活動においてどのような意味をもつのかを検討し、外部にもわかりやすい形で可視化する取組について検討した。その結果、従来より行われている学生の学修活動についての現状把握と改善のための全学調査である「ラーニング・ライフ」の結果を用いた SIH 道場実施による効果についての検証を行うこととなった。「ラーニング・ライフ」の調査は平成 28 年度にも実施されており、現在この調査結果について分析が進行中である。

以上のように、多くのプログラムにおいて授業設計コーディネーターが学生の学修成果を高く評価していることに加え、平成 28 年度は平成 27 年度の外部評価の結果を踏まえた改善の取組も進行している。よって本項目における自己評価は「3：おおむね達成できた」が妥当であると判断した。

○今後の改善点

- ▶ 「プログラム設計評価シート」には、今後の改善点やそれを考えるための手掛かりとなる記述が授業設計コーディネーターによって為されており、次年度の授業設計コーディネーターによる授業設計の際の有用な資源となることが期待できる。平成 29 年度授業設計コーディネーターに対して、SIH 道場の授業設計のスタートとなる「SIH 道場キックオフミーティング」において、昨年度の「プログラム設計評価シート」を踏まえた改善を求めると共に、その後の授業設計の段階で綿密な連携を行い、授業設計・改善の支援を行うことで、昨年度の反省を踏まえた授業設計が可能となり、学生の学習成果の向上につながることを期待できる。
- ▶ 応用理数コースのプログラム設計評価シートでは、「事前学習としてビデオコンテンツを見るように指導したが機器の不調のためにビデオコンテンツを見られない学生が多数いたようである」ことが報告されている。これ以外にも、授業設計コーディネーターや授業担当者からビデオ教材の視聴に関するトラブルが多数報告されていた。これを踏まえ、平成 29 年度からはビデオ教材を Moodle だけでなく、You Tube でも公開することとし、ビデオ教材の視聴環境の改善に取り組んでいる。このような、コンテンツ作成ワーキンググループによる支援やコンテンツの改善によって、より学生の学修が活発化することが期待できる。

外部評価者メモ部分

1	SIH 道場の 実施と改善	平成 27 年度 自己評価	平成 27 年度 外部評価	平成 28 年度 改善目標値	平成 28 年度 自己評価
1-3	教員は SIH 道場の 目標に到達したか	2	2	3	3

○自己評価の根拠（評価 3）

平成 28 年度 SIH 道場の授業担当教員を対象としたアンケートを実施した。昨年度は回収率は 33.9%という結果となったが、今年度は授業担当教員それぞれの担当部分の終了時期に合わせ、個別で依頼を行い、回収率の向上を図った。その結果、回収率は 64.4%となり、昨年度より大幅に回収率が向上する結果となった。

教員が SIH 道場の授業を通して身につける 3 つの到達目標について確認すると、アクティブ・ラーニングについては、「アクティブ・ラーニング型授業を実施することができる」に、「4.とても当てはまる」「3.どちらかといえば当てはまる」を選択した教員は、授業担当教員全体で 81%だった。反転授業について、「反転授業を実施することができる」に、「4.とても当てはまる」「3.どちらかといえば当てはまる」を選択した教員は、授業担当教員全体で 37%だった。ルーブリックについて、「ルーブリックを用いて学生を評価することができる」に、「4.とても当てはまる」「3.どちらかといえば当てはまる」を選択した教員は、授業担当教員全体で 59%だった。授業実践の振り返りについて、「自らの教育経験の振り返り（e ポートフォリオ等）の意義を理解した」に、「4.とても当てはまる」「3.どちらかといえば当てはまる」を選択した教員は、授業担当教員全体で 78%だった。プログラム全体の満足度として、「SIH 道場の教育プログラムは全体的に満足できるものであった」に、「4.とても当てはまる」「3.どちらかといえば当てはまる」を選択した教員は、授業担当教員全体で 77%という結果となり、昨年度の結果（49%）から大幅に上昇する結果となった。

加えて、SIH 道場担当教員は、授業終了後に e ポートフォリオ（Mahara）上や紙媒体で、授業実践についての振り返りを行うことになっている（平成 27 年 10 月 13 日が実施期限）。振り返りを行った教員は、紙媒体によるものも合わせると、担当教員 236 名中 111 名（47%）であった。

さらに、本項目については平成 27 年度の自己評価、外部評価が共に「2：達成が必ずしも十分ではない」と判断されたことから、改善の取組を行った。まず、AP 実施専門委員会による SIH 道場実施支援体制の振り返りと改善を行うための仕組みを整備することを目指し、平成 28 年度より教員アンケートに、実施支援の取組に対する満足度、及び要望についての自由記述欄を設け、実施支援体制の改善のために活用することとした。またこれに併せ、授業設計コーディネーターには「平成 28 年度『SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～』実施支援の取組に対する要望について」を送付し、総合教育センター及び AP 実施専門委員会に対する要望についての聞き取りを行うこととした。

以上のように、教員対象アンケートの結果と授業終了後の授業実践の振り返りの実施率が向上したことに加え、昨年度の外部評価の結果に対応する改善の取組が実施されていることから、本

項目について、「3：おおむね達成できた」と評価した。

○今後の改善点

- ▶ eポートフォリオ作成による教員の振り返りは、実施率が47%と低いため、より向上させる必要がある。これについて、平成29年度に向けてMaharaのシステムの改善を既に実施中であり、来年度は教員による振り返りの実施率の向上が期待できる。

外部評価者メモ部分

1	SIH 道場の 実施と改善	平成 27 年度 自己評価	平成 27 年度 外部評価	平成 28 年度 改善目標値	平成 28 年度 自己評価
1-4	次年度のプログラ ム改善に向けた検 証が実施されたか	3	3		4

○自己評価の根拠（評価 4）

各プログラムの授業設計コーディネーターが、「SIH 道場プログラム設計評価シート」に基づき SIH 道場の取組の振り返りを行う際には、各プログラムでの効果検証の参考資料として、学生および教員対象のアンケート集計結果を提供している。これらの資料を参考に、授業設計コーディネーターは総合的にプログラムを評価し、「SIH 道場プログラム設計評価シート」の項目「改善したい点」と項目「次年度に向けた対応」に記述を行っている（16 プログラム全てが記載）。

さらに、各学部・学科の大学教育再生加速プログラム実施専門委員会（以下、「AP 実施専門委員会」という。）委員が、学部単位での取組報告「SIH 道場の取組と課題」を作成し、プログラムの総括を行っている。加えて、「SIH 道場に関する評価・改善ワーキンググループ」において、SIH 道場を受講した 22 名の学生委員が SIH 道場の良かった点、改善点について提案を行っている。今年度実施した学生委員全員に対するインタビュー結果については、学生の回答に基づき現状をまとめた上で今後活かすためのポイントを提示している（本報告書「SIH 道場評価・改善ワーキンググループ学生委員からの提案」を参照）。各学部・学科の次年度の授業設計コーディネーターは、これらを参考にしてプログラム改善を行うことができる。以上のように、次年度のプログラム改善に向けた検証のステップは明確に位置づけられていると言える。

さらに、本項目において平成 27 年度の自己評価及び外部評価がいずれも「2：達成が必ずしも十分ではない」と判断されたことを受け、本項目について改善の取組を検討した。まず、外部評価委員から「プログラムの要素（e コンテンツ、Moodle、Mahara、授業方法等）はかなり整備されたが、利用の度合いはまだ十分ではない」「支援部はプログラム設計者の支援だけでなく、担当教員全員に対し支援することが望まれる」との指摘が為されたことを受け、実施支援の取組の振り返りと改善を行うための仕組みを整備すること、並びに各プログラム担当者からの要望を調査し、各コーディネーターと連携して可能な対応について検討することが必要であると考えた。これについて改善の取組を検討した結果、授業設計コーディネーターに対してプログラム設計評価シートを送付する際、総合教育センター及び AP 実施専門委員会に対する要望についての聞き取りを行う「平成 28 年度『SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～』実施支援の取組に対する要望について」を併せて送付することとなった。さらに、教員アンケートに、実施支援の取組に対する満足度についての項目、並びにコーディネーター・総合教育センター及び AP 実施専門委員会に対する要望についての自由記述欄を追加し、実施支援の取組の改善のためのリソースとすることとした。以上の取組は平成 28 年度に既に実施済みである。

このように、従来からのプログラム改善のための仕組みに加え、平成 28 年度には平成 27 年度の自己評価・学部評価の結果を踏まえた更なる改善の取組も進行している。このことから、本項

目における自己評価は「4：十分に達成できた」が妥当であると判断した。

○今後の改善点

- ▶ プログラム設計シートの項目「次年度に向けた対応」において、記載が具体的ではない点が見られることから、平成 29 年度の授業設計コーディネーターに対しては、次年度の改善につながる具体的な記載を行うよう依頼する必要がある。

外部評価者メモ部分

1	SIH 道場の 実施と改善	平成 27 年度 自己評価	平成 27 年度 外部評価	平成 28 年度 改善目標値	平成 28 年度 自己評価
1-5	実施のための支援 (教育改革推進部 門, ICT 活用教育部 門, SIH 道場コンテ ンツ作成 WG 等) は 適切に行われたか	4	3	4	3

○自己評価の根拠 (評価 3)

SIH 道場の実施の支援については、総合教育センター教育改革推進部門を中心とし、ICT 活用教育部門、SIH 道場コンテンツ作成ワーキンググループ等と協力して行った。主な内容は、次の 5 つである。①授業設計のサンプルの提示、②授業に必要な教材コンテンツの作成、③授業計画・実施中の随時個別相談対応、④授業担当者に対する説明会・FD の実施、⑤授業改善に向けた評価の支援。

「①授業設計のサンプルの提示」としては、授業設計コーディネーターが、SIH 道場の三つの必須項目を入れ込んだ設計を円滑に行えるよう、授業設計の開始前に、「必須項目設計表」のサンプルおよび「授業詳細」の例を示している。「②授業に必要な教材コンテンツの作成」としては、学生用テキストの作成・配布、反転授業用のビデオ教材の作成・Moodle 上での提供、ルーブリック評価表の作成・Moodle 上での提供、e ポートフォリオ上での教員の振り返りフォーマットの作成を行った。「③授業計画・実施中の随時個別相談対応」については、授業設計や実施時における授業設計コーディネーターからの問い合わせに対して、教育改革推進部門教員が随時回答を行った。「④授業担当者に対する説明会・FD の実施」については、平成 28 年度の SIH 道場実施に向けて、授業担当者を対象に SIH 道場の趣旨を説明し、アクティブ・ラーニングの授業方法を身につけるための FD・説明会を蔵本キャンパス、常三島キャンパスごとに計 6 回開催した。「⑤授業改善に向けた評価の支援」として、教育改革推進部門において、「SIH 道場プログラム設計評価シート」フォーマットの作成および学生・教員対象アンケート調査の設計、結果集計のとりまとめを行うなど、次年度の改善につなげるための評価活動の支援を行った。

また、上記の取組に加え、平成 27 年度の自己評価及び外部評価の結果がいずれも「2: 達成が必ずしも十分ではない」であったことを踏まえ、平成 28 年度に改善のための取組を検討した。この結果、①SIH 道場の意義を教員と共有するための簡略なリーフレットの作成と配布、②各学部において実施されている FD の現状の把握、③AP シンポジウムにおける SIH 道場の意義・改善策についての教員との協議、の 3 つの取組を行うこととなった。このうち、①については既にリーフレットの作成が完了し、様々な場で教員に配布中である。また②について、事業の支援を行う総合教育センター教育改革推進部門の教員が学部 FD 委員会に陪席し、学部 FD 委員や授業設計コーディネーターとの意見交換を行うなど、事業に対する相互理解を行うための取組を始めている。さらに③については、AP シンポジウムにおいて教員が SIH 道場の取組について協議と

提案を行える場を設けることとし、今年度より新たに「参加型ディスカッション」を実施した。

以上のように、実施のための支援が適切に行われたことに加え、平成 27 年度自己評価及び外部評価の結果を踏まえた改善の取組についても検討し、現在実施中である。以上を考え、本項目について、「3：おおむね達成できた」と評価した。

○今後の改善点

- ▶ 「AP シンポジウム」への参加者が少ないことから、平成 29 年度は実施日程の変更も含め、AP シンポジウムへの参加者拡大を目指した取り組みについて検討する。また、AP シンポジウム内の「参加型ディスカッション」についても、今年度は SIH 道場や AP の取組に関する議論が少なかったため、平成 29 年度に向けて企画の改善を検討する。

外部評価者メモ部分

2	アクティブ・ラーニングの普及	平成 27 年度 自己評価	平成 27 年度 外部評価	平成 28 年度 改善目標値	平成 28 年度 自己評価
2-1	アクティブ・ラーニングを学士課程全体に波及させるための環境整備が適切に行われたか	4	4		4

○自己評価の根拠（評価 4）

環境整備の一環として、平成 27 年度までに、アクティブ・ラーニングスペース教室の提供（計 4 教室）、e ポートフォリオシステム（Mahara）の導入及びマニュアルの提供と教員および学生対象の説明会の実施、「SIH 道場」関連図書の貸出の取組を実施した。これに加え、平成 28 年度は「SIH 道場」関連図書を追加し、アクティブ・ラーニングについての資料をより充実させた。

以上のように、アクティブ・ラーニングを普及させるための環境整備が適切に行われたため、本項目について、「4：十分に達成できた」と評価した。

○今後の改善点

- ▶ アクティブ・ラーニングスペース教室、関連図書の提供については、SIH 道場授業設計コーディネーターおよび授業担当教員への情報提供を継続的に行う必要がある。
- ▶ e ポートフォリオシステムについても、利用のための支援を継続する必要がある。

外部評価者メモ部分

2	アクティブ・ラーニングの普及	平成 27 年度 自己評価	平成 27 年度 外部評価	平成 28 年度 改善目標値	平成 28 年度 自己評価
2-2	アクティブ・ラーニングを学士課程全体に波及させるための取組が効果的に実施されたか	2	2	3	3

○自己評価の根拠（評価 3）

本項目においては、昨年度の自己評価・外部評価が共に「2：達成が必ずしも十分ではない」となった。よって平成 28 年度は、SIH 道場を担当した教員が、SIH 道場で実践しながら学んだアクティブ・ラーニングの手法を専門科目にも波及させていくことを支援するための取組を検討する必要があると考えた。

平成 27 年度までの取組として、学内を中心にアクティブ・ラーニングの事例調査を行い、アクティブ・ラーニングの手法と導入の目的、学問領域ごとにまとめた事例カード（27 事例）を作成した。平成 28 年度はこれに続き、7 例の事例カードを追加し充実させると共に、これを全学 FD の場で自由に閲覧できる資料として活用した。さらに、以上の事例カードをウェブ上で学内向けに公開し、教員がより自由に、かつ簡略に事例カードを閲覧できるようにした。

また、アクティブ・ラーニングの事例を教員が共有することを旨とした企画である「AP シンポジウム」において、教員によるアクティブ・ラーニング授業実施や反転授業実施の報告を行うだけでなく、今年度より教員がアクティブ・ラーニングや反転授業について自由に議論する「自由参加型ディスカッション」を実施した。これにより、AP シンポジウム参加者アンケートでは、「アクティブ・ラーニングの授業を実施する意義が理解できた」「自らの授業や業務に役立つ知見が得られた」の項目に対し、解答者すべてが「4. そう思う」「3. どちらかといえばそう思う」を選択するという結果になった。

以上のように、平成 27 年度の自己評価・外部評価の結果を踏まえた改善の取組が行われていることに加え、AP シンポジウムの参加者アンケートの結果はこうした取り組みが一定の成果を挙げていることを示す者であると考え、本項目における自己評価は「3：おおむね達成できた」が妥当であると判断した。

○今後の改善点

- AP シンポジウムについては、参加者数が 55 名となっており、教員への周知と参加の呼びかけが十分ではないといえる。学内での十分な周知によって、より多くの教員の参加を促すと共に、さまざまな分野の教員がアクティブ・ラーニング、反転授業の実践事例を報告できるよう、今後も企画を継続する。

外部評価者メモ部分

3	事業運営の体制	平成 27 年度 自己評価	平成 27 年度 外部評価	平成 28 年度 改善目標値	平成 28 年度 自己評価
3-1	AP 実施専門委員会の組織構成は、事業目的に照らして、適正なものであったか	4	4		3

○自己評価の根拠（評価 3）

AP 実施専門委員会は、次の 4 つを審議するために設置されている。①全学共通科目「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」の開発及び実施に関すること。②徳島大学におけるアクティブ・ラーニングに関する調査及び評価に基づく改善に関すること。③アクティブ・ラーニングを推進するための環境整備に関すること。④その他アクティブ・ラーニングの推進に関すること。

専門委員会は、副学長（教育担当）を委員長とし、全学共通教育センター長、総合教育センター教育改革推進部門長、各学部（学部併任された大学院教員を構成員として含む。）および全学共通教育センターから選出された教員 各 1 人、総合教育センターから選出された教員 3 人、学務部長、学務部教育支援課長及び学務部教育支援課教育企画室長、その他専門委員会が必要と認める者で構成されている。

AP 実施専門委員会において、SIH 道場の実施に関する、全体統括、授業設計コーディネーター等の人材の選出・割り当て等を行う他、事業全体の評価に基づく改善の計画を審議し、実施に当たっては、総合教育センター教育改革推進部門や SIH 道場コンテンツ作成ワーキンググループ、教育について考え提案する学生・教職員専門委員会（SIH 道場に関する評価・改善ワーキンググループ）が連携して支援や評価を行い、各学部・学科の授業設計コーディネーターを通じた部局の SIH 道場実施支援を図った。

しかし事業を継続していく中で、各プログラムの授業設計・全体統括を行う授業設計コーディネーターが AP 実施専門委員会の構成員に含まれておらず、そのため授業設計コーディネーターが AP 実施専門委員会における議論に参加できない、他のプログラムの実施状況を知る機会が用意されていない等の問題が生じてきている。このことを考慮し、AP 実施専門委員会の組織構成は、事業目的に照らして適正なものではあるが、事業のより円滑な継続や今後の議論のために、規則の改善が必要であると考え、「3：おおむね達成できた」と評価した。

○今後の改善点

- 今後、AP 実施専門委員会規則を一部改正し、授業設計コーディネーターが AP 実施専門委員会の構成員として議論に参加できる制度を整備する。

外部評価者メモ部分

3	事業運営の体制	平成 27 年度 自己評価	平成 27 年度 外部評価	平成 28 年度 改善目標値	平成 28 年度 自己評価
3-2	AP 実施専門委員会の運営は、事業目的に照らして、適正なものであったか	3	3		3

○自己評価の根拠（評価 3）

AP 実施専門委員会では、平成 27 年度において委員会を 5 月、10 月、2 月の計 3 回開催した。委員会においては、平成 27 年度の SIH 道場の設計・実施状況のとりまとめを行い、各学部・学科でプログラムの改善を行うことができるよう、アンケート調査等の実施を含む評価指標の策定を審議した。加えて、SIH 道場の取組が学士課程全体に波及し、アクティブ・ラーニングが全学的に展開するための施策の検討等を行った。AP 実施専門委員会の委員は、AP 実施専門委員会での決定事項を各学部・学科の授業設計コーディネーターに伝えるという役割を担うほか、SIH 道場終了後に授業設計コーディネーターがプログラム設計について行った振り返りの内容や課題をとりまとめ、AP 実施専門委員会に報告する。それを受けて、AP 実施専門委員会では、事業運営の方法を見直すことができる。

今年度の委員会を通して、各プログラムの授業設計コーディネーターが SIH 道場を設計・運営・実施できるような支援の体制を整えることができた。また、実施したプログラムの振り返りにより、次年度の SIH 道場の設計・実施の改善に繋げることのできる評価の仕組みも構築することができた。しかしながら、AP 実施専門委員会委員と授業設計コーディネーターとの連携という点において、プログラムによっては情報共有が十分ではないという課題も見られたため、「3：おおむね達成できた」と評価した。

○今後の改善点

- 今後、AP 実施専門委員会規則を一部改正し、授業設計コーディネーターが AP 実施専門委員会の構成員として議論に参加できる制度を整備する。

外部評価者メモ部分

3	事業運営の体制	平成 27 年度 自己評価	平成 27 年度 外部評価	平成 28 年度 改善目標値	平成 28 年度 自己評価
3-3	事業の効果検証に基づき、改善に繋げるための PDCA サイクルが整備されていたか	3	3		4

○自己評価の根拠（評価 4）

AP 実施専門委員会は、SIH 道場を含む、AP 事業全体の評価指標を策定し計画としてまとめ、学生および教員対象のアンケート調査を計画・実施した他、これらのアンケート集計結果に基づき、授業設計コーディネーターが次年度の改善に向けた振り返りを行うために、「プログラム設計評価シート」を提供した。各学部・学科の AP 実施専門委員会委員は、この設計評価シートの記載内容等に基づき、学部での SIH 道場の成果と課題を報告書にまとめている。これらのプログラムの実施結果を、事業運営や実施支援の観点から総合的に自己評価し、その結果をもとに外部評価委員会による評価を受けることで、次年度の改善につなげることができる。今年度は、SIH 道場の実施初年度として、SIH 道場プログラムの改善のサイクルの構築とともに、AP 事業全体の PDCA のサイクルの整備を行った。

以上のように、次年度の事業改善に向けた PDCA サイクルが平成 27 年度までに整備された。このサイクルに基づき、平成 28 年度は外部評価委員による評価とコメントに基づいた改善策を検討した上で、今年度の実施が可能なものについては具体的な対応を行った。以上のように、平成 28 年度はこれまで整備した PDCA サイクルに基づいた事業の改善が適切に行われたと判断し、本項目について「4：十分に達成できた」と評価した。

○今後の改善点

- ▶ 今後も PDCA サイクルを実施し、自己評価や外部評価の結果を踏まえた事業全体の改善策について継続的に検討する。

外部評価者メモ部分

4	情報公開	平成 27 年度自 己評価	平成 27 年度 外部評価	平成 28 年度 改善目標値	平成 28 年度 自己評価
4-1	AP 事業の取組を学 内へ適切に広報し 共有していたか	3	3		3

○自己評価の根拠（評価 3）

AP 事業の取組については、大学ウェブページにおいて情報提供を行っている。SIH 道場の概要や目的、年度計画等を記載している他、SIH 道場の学生用テキスト（PDF 版）も公開している。また、平成 28 年度に実施した SIH 道場の取組を共有し課題を検討するために、学内教職員、学生を参加対象とする「SIH 道場振り返りシンポジウム」を開催した（学内教職員、学生および外部評価委員を含む計 127 名が参加）。その他、AP 事業の目的や内容について大学全体で共有化を図るために、徳島大学大学教育再生加速プログラム事業リーフレットを作成し学内教職員に配布している。

さらに平成 28 年度は SIH 道場実施 2 年目にあたり、この取組の概要や具体的な授業内容については教員間で徐々に共有されていると考えられる。SIH 道場では年度ごとに各プログラムの授業設計コーディネーター及び授業担当者を交代することで、教員間にこの事業の理念や具体的な取り組みは波及するよう設計されており、今後も事業を継続的に実施することで取組の概要や具体的な内容が広がっていくことが期待できる。

以上のように、AP 事業について学内へ広報し共有する取組を行っているが、その成果は必ずしも十分ではない。例えば SIH 道場の総まとめの企画と位置付けられている「SIH 道場振り返りシンポジウム」への参加者数は、平成 27 年度は 127 名だったのに対し、平成 28 年度は 94 名となっており、昨年度に比べて大幅に減少している。

しかし同時に、今年度は AP に関連する企画の実施形態にも変更を加えるなど、新たな取り組みも行われている。例えば平成 27 年度は、「大学教育カンファレンス in 徳島」の中の 1 プログラムと位置付けられていた「AP シンポジウム」を、平成 28 年度は新たに独立したプログラムとして実施した。この結果、AP シンポジウムには学内外から 55 名が参加し、かつ参加者アンケートの結果においても「アクティブ・ラーニングの授業を実施する意義が理解できた」の項目において「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の回答が 100%を占めるなど、高い評価を得た。また現在、AP の情報発信を行う HP の改修作業が進行中であり、平成 29 年度中にリニューアルを完了する予定である。リニューアル後の HP においては、これまで様々な部署の HP に散らばっていた情報や成果報告を一元化する予定であり、これによって学内への広報もより効率的になることが期待できる。

以上から、学内教員への広報の方法についてはさらなる工夫の余地があるものの、現在改善の取組が適切に行われていると考えられるため、「3：おおむね達成できた」と評価した。

○今後の改善点

- 「SIH 道場振り返りシンポジウム」については、学内での十分な周知によって、より多くの教職員、学生に参加を促す必要がある。

外部評価者メモ部分

4	情報公開	平成 27 年度自 己評価	平成 27 年度 外部評価	平成 28 年度 改善目標値	平成 28 年度 自己評価
4-2	AP 事業の取組を学 外へ適切に広報し 情報提供していた か	4	4		4

○自己評価の根拠（評価 4）

AP 事業の取組については、大学ウェブページに随時掲載している他、学内外の教職員を参加対象とする AP シンポジウム（「アクティブ・ラーニング」「反転授業」）を開催し、学内教員が実践事例を報告するワークショップを実施することで、学内外の教職員と取組を共有する機会を設けた。

また、平成 28 年度から徳島大学は、AP 事業に新設された「テーマ別幹事校」に応募し、テーマ I 「アクティブ・ラーニング」の幹事校として採択された。現在、テーマ I 採択校 9 校の取組について情報発信を行うため、①採択校 9 校の取組の概要と成果を閲覧できるポータルサイトの構築、②授業動画配信サイトにおけるアクティブ・ラーニング型授業の実施風景及び授業担当教員へのインタビューの動画の配信、の 2 つの取組を進めている。これにより、徳島大学の AP の取組についての情報発信がさらに拡大されることが期待できる。

以上のことから、AP 事業の取組を学外へ適切に広報し情報提供していたと言えるため、本項目について、「4：十分に達成できた」と評価した。

○今後の改善点

- 「SIH 道場振り返りシンポジウム」及び「AP シンポジウム」については、学外からの参加者をさらに拡大するため、企画の内容について再検討の余地がある。

外部評価者メモ部分